



# Subscription Central 1-latest

Red Hat Cloud Access リファレンスガイド



# Subscription Central 1-latest Red Hat Cloud Access リファレンスガイド

---

Red Hat Subscription Management Documentation Team  
rhsm-docs@redhat.com

## 法律上の通知

Copyright © 2024 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux<sup>®</sup> is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java<sup>®</sup> is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS<sup>®</sup> is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL<sup>®</sup> is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js<sup>®</sup> is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack<sup>®</sup> Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

## 概要

Red Hat Cloud Access を使用すると、Red Hat のサブスクリプションを、物理システムまたはオンプレミスシステムから、Red Hat のフルサポートを提供する特定の認定クラウドプロバイダーに移動できます。このリファレンスは、ワークロードをパブリッククラウドに移行している場合に使用できます。

---

## 目次

多様性を受け入れるオープンソースの強化 .....	3
第1章 RED HAT CLOUD ACCESS プログラムの概要 .....	4
1.1. 対象となる CLOUD ACCESS 製品	4
1.2. RED HAT CLOUD ACCESS 対象サブスクリプションのカウント単位の変換	5
1.3. 対象となる CLOUD ACCESS プロバイダー	5
第2章 CLOUD ACCESS の使用 .....	7
2.1. オプション 1: スムーズな使用開始	7
2.2. オプション 2: サブスクリプションの追跡とゴールドイメージへのアクセス	7
2.3. オプション 3: 高度な RHEL 管理	8
第3章 ゴールドイメージについて .....	11
3.1. ゴールドイメージへのアクセス	11
3.2. イメージタイプ	11
3.3. 更新およびパッチ	11
3.4. AZURE でのゴールドイメージの使用	12
3.5. AWS でのゴールドイメージの使用	14
3.6. GOOGLE でのゴールドイメージの使用	15



## 多様性を受け入れるオープンソースの強化

Red Hat では、コード、ドキュメント、Web プロパティにおける配慮に欠ける用語の置き換えに取り組んでいます。まずは、マスター (master)、スレーブ (slave)、ブラックリスト (blacklist)、ホワイトリスト (whitelist) の 4 つの用語の置き換えから始めます。この取り組みは膨大な作業を要するため、今後の複数のリリースで段階的に用語の置き換えを実施して参ります。詳細は、[Red Hat CTO である Chris Wright のメッセージ](#) をご覧ください。

## 第1章 RED HAT CLOUD ACCESS プログラムの概要

Red Hat Cloud Access プログラムは、クラウドで Red Hat 製品のサブスクリプションを使用するお客様に、サブスクリプションの移植性を提供することを目的としています。

Red Hat Cloud Access には、以下の利点があります。

- Cloud Access は、ほとんどの Red Hat サブスクリプションで無料で利用できます。
- Red Hat サブスクリプションのすべての利点と、Red Hat との既存のサポート関係を維持できます。
- Red Hat 製品の使用方法や場所を柔軟に選択できます。
- ゴールドイメージや [Azure Hybrid Benefit for Linux](#) などの付加価値のある機能にアクセスできます。

### 1.1. 対象となる CLOUD ACCESS 製品

サブスクリプションの移植性は、ほとんどの Red Hat 製品に含まれる機能であり、Red Hat テクノロジーで構築されたオープンハイブリッドクラウドインフラストラクチャーを作成する際に重要となります。

Red Hat 製品の多くはデフォルトでクラウド対応となっていますが、マルチテナントのパブリッククラウド (さまざまなプロバイダー、各種テクノロジー/プラットフォーム、共有インフラストラクチャー) の性質や、このようなインフラストラクチャーにアクセスできるお客様が限られていることなどから、お客様が認識しておく必要のある技術的な課題が生まれてくる可能性があります。

対象となる Cloud Access 製品を理解するのに役立つ一般的なガイドラインの例を以下に示します。

- サブスクリプション期間が有効である。
- サブスクリプションがクラウドで使用できる (つまり別の場所で使用されていない)。
- サブスクリプションに、クラウド対応のカウント単位がある。カウント単位は、デプロイするクラウドプロバイダーやインスタンスタイプにより異なります。クラウド対応のカウント単位の例としては、コア、コアバンド、管理対象ノード、RAM、ストレージバンド、vCPU、仮想ノード/ゲストなどがあります。
- クラウドにデプロイする Red Hat 製品が、マルチテナントのパブリッククラウドインフラストラクチャーでの使用に技術的に適している。

対象外の製品およびサブスクリプションの例には、以下が含まれます。

- virt-who を必要とする仮想データセンターまたはその他の無制限の RHEL ゲストサブスクリプション
- Red Hat Virtualization 製品 (ネストされた仮想化はサポート対象外)
- ソケットやソケットのペアなど、物理的なカウント単位があるサブスクリプション
- Red Hat がホストするオフファリングのサブスクリプション

これらのガイドラインは最終的なものではありません。対象となる Red Hat 製品とサブスクリプションは、新しい製品とサブスクリプションタイプの導入に伴い、時間の経過とともに変化します。また、パブリッククラウドインフラストラクチャーでの製品の使用方法に関する具体的な情報は、Red Hat の製品ド



キュメントを参照してください。

Red Hat 製品がパブリッククラウドで使用できるかどうか不明な場合は、Red Hat アカウントマネージャーにお問い合わせください。

## 1.2. RED HAT CLOUD ACCESS 対象サブスクリプションのカウント単位の変換

クラウドでのサブスクリプションの使用状況を把握するには、各サブスクリプションに関連付けられたカウント単位に基づいてカウントできることに加えて、サブスクリプションとエンタイトルメントの関係を把握する必要があります。

各 Red Hat サブスクリプションには、Red Hat サブスクリプション管理ツールでのシステム登録に使用できるエンタイトルメントが少なくとも1つ含まれています。パブリッククラウドなどの仮想環境で使用される Red Hat サブスクリプションには、追加のエンタイトルメントが含まれている場合があります。

たとえば、1つの Red Hat Enterprise Linux Server (RHEL) (物理ノードまたは仮想ノード) サブスクリプションには、物理エンタイトルメントが1つ、または仮想エンタイトルメントが2つ含まれます。このタイプのサブスクリプションをベアメタルの物理ハードウェアで使用すると、物理 RHEL サーバーを1台利用できます。パブリッククラウドのような仮想化環境で使用すると、仮想 RHEL サーバーを最大2台利用できます。

カウント単位の変換は、Red Hat 製品、サブスクリプションタイプ、およびデプロイメント環境によって大きく異なりますが、以下の表で一般的なガイドラインをいくつか紹介します。

表1.1 Red Hat Cloud Access カウント単位の変換表

物理ノードまたは仮想ノード	1x 物理ノードまたは 2x 仮想ノード	2x 仮想ノード
システム	通常、ソケットまたはコア	1x 仮想ノード
コアまたは仮想 CPU	コア	vCPU (通常は 2vCPU:1Core)
コアバンド	コアのグループ (例: 2、4、16、64、128)	vCPU (通常は 2vCPU:1Core)
ソケット	ソケット、ソケットのペア、コア	該当なし

### 関連資料

エンタイトルメント数、カウント単位、および各 Red Hat 製品サブスクリプションの関連情報は、Red Hat カスタマーポータル[の Red Hat Subscription Manager ユーザーインターフェイス](#) を参照してください。

Red Hat 製品のカウント単位、変換およびカウントのガイドラインは、[Appendix 1 of the Red Hat Enterprise Agreement](#) を参照してください。

## 1.3. 対象となる CLOUD ACCESS プロバイダー

Red Hat には、認定クラウドおよびサービスプロバイダー (CCSP) パートナーの大規模なエコシステムがあります。Cloud Access のお客様は、このエコシステムで対象のサブスクリプションを使用できま

す。[Red Hat Ecosystem Catalog](#) には、主なプロバイダー (Alibaba、AWS、Google Cloud Platform、IBM Cloud、および Microsoft Azure) と、認定済みのクラウドイメージおよびインスタンスタイプを提供するその他のプロバイダーの詳細が掲載されています。

Cloud Access プロバイダーを選択する際には、以下の推奨事項を考慮してください。

- プロバイダーの環境に仮想マシンイメージをインポートするには、プロバイダーがサポート対象のメカニズムを提供している必要があります。



#### 注記

クラウドエコシステムカタログで、**イメージのアップロード**を提供している CCSP パートナーを探してください。

- Cloud Access をご利用のお客様は、イメージのアップロードができない場合には、Red Hat ゴールドイメージを使用するか、オンデマンドの PAYG Red Hat イメージまたはインスタンスを BYOS に変換できる必要があります。



#### 注記

Cloud Access ゴールドイメージは AWS、Azure、および Google で利用できます。[Azure Hybrid Benefit for Linux](#) は、Red Hat Cloud Access のお客様に PAYG から BYOS への変換機能を提供します。

- プロバイダーは TSANet のメンバーであり、必要に応じて Red Hat と協力し、お客様の一般的な問題を解決する必要があります。

Red Hat は、ご利用のハイブリッドクラウドインフラストラクチャーで Red Hat 製品を正常にデプロイおよび使用できるよう、お客様のサポートに努めています。対象となる Cloud Access 製品とプロバイダーのガイドラインを提供し、お客様の成功を支援しています。このガイドラインに準拠することを強く推奨します。

このガイドライン外で Red Hat 製品をデプロイする場合は、以下の条件に注意してください。

- 製品またはサブスクリプションは設計どおりに動作しない場合があります。
- 製品のパフォーマンスが低下する可能性があります。
- 製品の機能が限定される可能性があります。
- Red Hat は、必要とされるサポートレベルを提供できない可能性があります。詳細は、[Red Hat のサードパーティーのサポートポリシー](#) を参照してください。

## 第2章 CLOUD ACCESS の使用

Cloud Access プログラムは、クラウドで Red Hat 製品を使用するお客様に、より良いサービスとより多くの価値を提供するために、このたび見直しが行われました。

Cloud Access のサービスは、次の優先事項を考慮して見直されました。

- 使用を開始するときの負担を減らし、お客様が簡単に使用できるようにする。
- 付加価値のある機能を増やすことで、お客様がハイブリッドクラウドインフラストラクチャー全体の RHEL デプロイメントを管理できるようにする。

プログラムの見直しにより、お客様は以下の利点が得られます。

- 使用開始時に、付加価値のあるサービスとして、ゴールドイメージ、インスタンスの自動登録、高度な RHEL サブスクリプション使用状況レポートなどを新たに利用できます。
- Cloud Access 用に Red Hat サブスクリプションを登録したり有効にしたりする必要がなくなりました。
- クラウドプロバイダーをこれまで以上に自由に選択できます。

Cloud Access のお客様は、より幅広い選択肢の中から選択できるようになりました。自身のニーズに最も適したオプションから始めることを推奨しますが、時間の経過とともに変化するニーズに応じて、複数のオプションや異なるオプションを選択することもできます。

次のセクションでは、利用可能なオプションと、お客様が各オプションで期待できるエクスペリエンスについて説明します。

### 2.1. オプション 1: スムーズな使用開始

このオプションでは、特定のオンボーディング要件に対応する必要なく、選択肢と柔軟性を得ることができます。これは、Red Hat からのサポートを最小限しか受けずにすぐに使用開始することを希望するお客様を対象としています。

オプション 1 は、以下を優先事項としているお客様に最適です。

- クラウドで使用するアクティブな未使用の Red Hat サブスクリプションがある。
- 仮想マシンイメージを構築および維持し、それらのイメージを選択したクラウドにインポートする方法を理解できる。
- ゴールドイメージを使用する必要も予定もない。
- クラウドでの Red Hat サブスクリプション使用状況の追跡に対するサポートは必要ない。
- 対象となる Red Hat 製品およびクラウドプロバイダーのガイドラインを理解して準拠できる。

### 2.2. オプション 2: サブスクリプションの追跡とゴールドイメージへのアクセス

このオプションでは、最小限のオンボーディング要件で選択肢と柔軟性を得ることができます。このオプションは、従来の Cloud Access のサービスで、お使いの Red Hat 製品に適したクラウドプロバイダーの選択、クラウドでのサブスクリプションの使用状況追跡、ゴールドイメージの使用など、よりキュレートされたサービスを提供します。

オプション 2 は、以下を優先事項としているお客様に最適です。

- クラウドで使用するアクティブな未使用の Red Hat サブスクリプションがある。
- ハイブリッドクラウドインフラストラクチャー全体の Red Hat サブスクリプションおよび目的のエンタイトルメントの使用状況を 1 か所に表示および管理する。
- Red Hat 製品およびクラウドプロバイダーの対象となるガイドラインを考慮する必要がない。
- ゴールドイメージへのアクセスを簡単に依頼できる。
- ユーザーインターフェイスではなく API を使用して環境を管理する。

## 手順

1. Red Hat カスタマーポータル [Cloud Access Customer Interface](#) に移動し、Red Hat アカウントにサインインします。
2. 新しい Cloud Access のお客様は、**Enable a new provider** をクリックして新しいプロバイダーを追加する必要があります。
3. ドロップダウンリストから認定プロバイダーのいずれかを選択して、プロバイダーアカウント情報を入力し、プロバイダーのインフラストラクチャーで使用予定の製品ごとにエンタイトルメント数を入力します。
4. **Enable** をクリックします。



### 注記

製品の有効化プロセスでは、使用する予定のエンタイトルメントとプロバイダーを追跡できます。基礎となる製品のサブスクリプションに変更や影響が生じることはありません。

新しいプロバイダーが追加されると、メインの Cloud Access ユーザーインターフェイスページで入力した製品エンタイトルメントおよびプロバイダーアカウント情報とともにプロバイダーが表示されます。この情報は、クラウドストラテジーの変更に合わせて変更したり、更新したりできます。

既存の Cloud Access のお客様には、以前に追加したすべてのプロバイダーが表示され、必要に応じて既存のプロバイダーに変更を加えたり、他のプロバイダーや製品を追加したりできます。

## 2.3. オプション 3: 高度な RHEL 管理

このオプションは、[Red Hat Hybrid Cloud Console](#) でホストされる Red Hat の管理、自動化、および IT 最適化サービスを中心に構築されています。RHEL をクラウドで使用している場合や、Red Hat への RHEL (8.3.1 以上) インスタンスの自動接続を使用している場合は、使用の開始が簡素化されます。

オプション 3 は、以下を優先事項としているお客様に最適です。

- AWS および Azure で使用するアクティブな未使用の RHEL サブスクリプションがある。
- ハイブリッドクラウドインフラストラクチャー全体の実際の RHEL サブスクリプション使用状況を 1 か所に表示する。
- [Simple Content Access](#) を有効にしている。

- AWS および Azure の RHEL インスタンスを Insights などの付加価値サービスに自動的に接続する。
- ゴールドイメージ (AWS および Azure のみ) を使用する。

## 手順

1. [Hybrid Cloud Console](#) に移動し、Red Hat アカウントにサインインします。



### 注記

Hybrid Cloud Console のビューは、新規のお客様と既存のお客様では異なる場合があります。Red Hat ホストのサービスをすでに使用している場合は、接続したシステムの概要と、詳細なシステム情報およびその他の推奨事項へのリンクが表示されます。新規のお客様には、利用可能なサービスの詳細を調べるためのリンクが表示されます。

2. Sources アプリケーションで Red Hat アカウントとクラウドプロバイダーアカウントとの間の接続を作成します。
  - a. **Configure** セクションに移動します。
  - b. **Connect with Sources** をクリックします。
  - c. **Cloud Sources** を選択します。
  - d. **Add source** をクリックします。
3. 使用するクラウドプロバイダーを選択し、**Next** をクリックします。



### 注記

Cloud Sources を使用したゴールドイメージは、現在 AWS および Azure でのみ利用できます。

## AWS ソースの場合

1. **AWS\_prod** など、ソースにわかりやすい名前を入力し、**Next** をクリックします。
2. 使用する設定モードを選択し、AWS アクセスキー ID およびシークレットアクセスキーを指定し、**Next** をクリックします。
3. **RHEL management bundle** を選択し、**Next** をクリックします。



### 注記

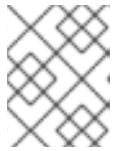
Cost Management は、Red Hat OpenShift Container Platform にのみ使用されます。

4. 詳細を確認し、**Add** をクリックして AWS ソースの作成を終了します。

## Azure ソースの場合

1. **Azure\_build** など、ソースにわかりやすい名前を入力し、**Next** をクリックします。

2. **RHEL management bundle** を選択し、**Next** をクリックします。



#### 注記

Cost Management は、Red Hat OpenShift Container Platform にのみ使用されます。

3. 手順に従ってオフライントークンを作成します。
4. Ansible コマンドをダウンロードして実行します。Azure インスタンスのホスト名/IP アドレスおよびオフライントークンは置き換えます。



#### 注記

Ansible コマンドは、Azure アカウント/サブスクリプション内で実行している Azure インスタンスを使用でき、**ansible-galaxy** がインストールされたマシンで実行できます。

5. Ansible コマンドが正常に完了したら、**Next** をクリックします。
6. 詳細を確認し、**Add** をクリックして Azure ソースの作成を終了します。

Sources 設定ダッシュボードを使用して、クラウドソースの表示、変更、または削除を行うことができます。また、Insights やサブスクリプションなど、関連する Red Hat サービスの詳細を確認できるリンクがあります。

#### 関連資料

- 詳細は、[Understanding and getting your AWS credentials](#) を参照してください。
- 詳細は、[Azure Instance Metadata Service \(Windows\)](#) を参照してください。
- Red Hat [Hybrid Cloud Console](#) で利用可能な Red Hat サービスおよび関連アプリケーションのソース設定に関する詳細は、[Red Hat Cloud Platform のドキュメント](#) を参照してください。

## 第3章 ゴールドイメージについて

Red Hat ゴールドイメージは、Cloud Access を使用するお客様向けの一部の Red Hat CCSP 環境で利用できる、クラウド対応の Red Hat 仮想マシン (VM) イメージです。クラウドで BYOS ユースケース向けに独自のカスタムイメージを使用する代わりに、このゴールドイメージを使用できます。ゴールドイメージは信頼できるソースでビルドおよび維持されており、Cloud Access を使用するお客様のみが利用できます。

ゴールドイメージを使用すると、独自のイメージをクラウドプロバイダーの環境にビルド、維持、およびインポートすることなく、クラウドに Red Hat インスタンスを迅速にデプロイできます。

### 3.1. ゴールドイメージへのアクセス

ゴールドイメージは、Red Hat Cloud Access のお客様には無償で提供されます。ゴールドイメージにアクセスするには、対応する Red Hat 製品のサブスクリプションをお持ちである必要があります。2章 [Cloud Access の使用](#) の説明に従って、[Cloud Access ユーザーインターフェイス](#) または [cloud.redhat.com](#) の Cloud Sources を使用して、クラウドプロバイダーアカウントを Red Hat に接続する必要があります。

#### 例 1

Azure で Red Hat Enterprise Linux Server (物理または仮想ノード) サブスクリプションを使用する必要があります。

- RHEL Server サブスクリプションは、RHEL ゴールドイメージに対応します。
- お客様がクラウド接続ステップを完了すると、指定の Azure アカウント (サブスクリプション ID) に、Azure で利用可能な全 RHEL ゴールドイメージへのアクセスが付与されます。

#### 例 2

AWS で Red Hat JBoss Web Server サブスクリプションを使用します。

- JBoss Web Server サブスクリプションは、JBoss Web Server ゴールドイメージに対応しません。
- お客様がクラウド接続ステップを完了すると、指定の AWS アカウント (サブスクリプション ID) に、AWS で利用可能な全 JBoss Web Server ゴールドイメージへのアクセスが付与されます。

### 3.2. イメージタイプ

ゴールドイメージは、主に AWS、Azure、および Google での RHEL BYOS ユースケース用にビルドされていますが、AWS でのみ、Red Hat Middleware、Red Hat Storage、および RHEL for SAP のユースケース用にビルドされた追加のゴールドイメージがあります。

ゴールドイメージのタイプと提供は、お客様のニーズに合わせて随時拡大されます。

### 3.3. 更新およびパッチ

ゴールドイメージからデプロイされたクラウドインスタンスに対して更新およびパッチを提供する方法は、イメージタイプおよびクラウドプロバイダーにより異なります。

#### AWS ゴールドイメージ

- AWS ゴールドイメージは、EC2 で実行される Red Hat Update Infrastructure (RHUI) を使用するように事前設定されています。
- 引き続き、ゴールドイメージからデプロイされたクラウドインスタンスのメイン更新ソースとして RHUI を使用できます。この場合は、実際に Red Hat 製品サブスクリプションをこれらのインスタンスに割り当てる必要はありません。
- 必要に応じて、RHUI を無効にして、Red Hat Satellite または Red Hat Subscription Management を使用してクラウドインスタンスを管理できます。



### 注記

RHUI を使用する方法を選択する場合は、アカウントでアクティブな Red Hat 製品サブスクリプションの数に注意して、AWS で Red Hat クラウドインスタンスを過剰にデプロイしないように注意してください。

### Azure ゴールドイメージ

- RHEL 8.4 (以降) のゴールドイメージは、Azure で RHUI を使用するように事前設定されています。
- RHEL 8.3 (以前) のゴールドイメージは RHUI を使用するように設定されていないため、Red Hat Satellite または Red Hat Subscription Management で管理する必要があります。

### Google ゴールドイメージ

- Google ゴールドイメージは、GCP で実行される RHUI を使用するように設定されていません。
- GCP のゴールドイメージからデプロイされた Red Hat クラウドインスタンスは、Red Hat Satellite または Red Hat Subscription Management を使用して管理する必要があります。

## 3.4. AZURE でのゴールドイメージの使用

ゴールドイメージを使用すると、標準インターフェイス (Azure Portal、Azure CLI、または PowerShell Cmdlet) を使用して、BYOS 用の Azure に RHEL 仮想マシンをプロビジョニングできます。Azure ゴールドイメージには、以下の条件があります。

- Microsoft がビルド、維持、公開している
- Azure の商用および政府リージョンでは利用可能だが、中国では使用できない
- RHEL イメージのみ
- Azure Hybrid Benefit の対象外

### 関連資料

#### Microsoft ドキュメント

- [Red Hat gold images in Azure](#)
- [Overview of RHEL images in Azure](#)

### 3.4.1. Azure でのゴールドイメージの命名および特定



Azure で RHEL ゴールドイメージを検索して起動する方法は複数あります。たとえば、Azure Portal、Azure CLI、および PowerShell Cmdlet などです。Azure の Red Hat ゴールドイメージの命名規則は **RedHat:[Offering Name]:[Red Hat Product]-[OS Disk Type]-[Azure VM Generation]:[Red Hat Version].[Red Hat Release].[Image Creation Date]** です。

ゴールドイメージ Uniform Resource Name (URN) の例として **RedHat:rhel-byos:rhel-vm8-gen2:8.0.20200715** があります。

### 3.4.2. Azure Portal でのゴールドイメージの検索

1. Cloud Access で有効になっている Azure サブスクリプションを使用して、[Azure Portal](#) にログインします。
2. **Create a Resource > See All**の順に移動します。
3. ページの上部に利用可能なプライベートオファーが表示されます。
4. **View private offers** をクリックします。Red Hat Enterprise Linux の "Bring your own license" オファリングは、プライベートオファーのリストにあります。

### 3.4.3. Azure CLI でのゴールドイメージの検索

1. Cloud Access で有効になっている Azure サブスクリプションを使用していることを確認します。

```
az account show
```

2. 利用可能な RHEL ゴールドイメージのリストを表示します。

```
az vm image list --publisher RedHat --offer rhel-byos --all
```

3. 使用するゴールドイメージのバージョンを特定し、URN をコピーします。仮想マシンをプロビジョニングするには、この URN が必要です。

### 3.4.4. Azure PowerShell Cmdlet でのゴールドイメージの検索

このコマンド例では、Cloud Access への登録時に指定した Azure アカウントと共有された US East リージョンの RHEL ゴールドイメージをすべて表示します。

```
Get-AzVMImageSKU -Location "East US" -PublisherName RedHat -Offer rhel-byos
```

### 3.4.5. Azure でのゴールドイメージの使用

#### Azure Portal の使用

1. [Azure Portal でのゴールドイメージの検索](#) の手順 3 および 4 で説明されているプライベートオファーを表示します。
2. **Create** ドロップダウンメニューをクリックし、使用する RHEL ゴールドイメージバージョンを選択します。残りのプロビジョニング手順は、他の RHEL Marketplace イメージと同じです。

#### Azure CLI の使用

1. [Azure CLI でゴールドイメージの検索](#) の手順 3 のイメージ URN を使用して Azure の条件に同意します (イメージごとに 1 回のみ)。

```
az vm image terms accept --urn RedHat:rhel-byos:rhel-lvm8-gen2:8.0.20200715
```

2. `az vm create` コマンドを使用して仮想マシンをプロビジョニングします。

```
az vm create -n my-rhel-byos-vm -g my-rhel-byos-group --image RedHat:rhel-byos:rhel-lvm8-gen2:8.0.20200715
```

### 3.5. AWS でのゴールドイメージの使用

ゴールドイメージを使用すると、標準のインターフェイス EC2 コンソール、AWS CLI、および AWS PowerShell Cmdlet を使用して、AWS 内の仮想マシンをプロビジョニングできます。

AWS ゴールドイメージには、以下の条件があります。

- Red Hat がビルド、維持、公開している
- AWS の商用リージョンでは利用可能だが、中国または GovCloud では利用できない
- EC2 で実行される Red Hat Update Infrastructure (RHUI) を使用するように事前設定されている
- RHEL、RHEL for SAP、Red Hat Middleware、および Red Hat Storage イメージ

#### 関連資料

- [Release Notes for Red Hat Enterprise Linux AMIs in AWS EC2](#)
- [Red Hat Gluster Storage Deployment Guide for Public Cloud](#)
- [Deploying Red Hat JBoss Enterprise Application Platform on Amazon EC2](#)

#### 3.5.1. AWS でのゴールドイメージの命名および特定

AWS で RHEL Amazon Machine Images (AMI) を検索して起動する方法は複数あります。たとえば、EC2 マネジメントコンソール、AWS CLI、PowerShell Cmdlet などです。AWS における Red Hat AMI の命名規則を以下に示します。

- 最初の GA AMI リリース: **[Red Hat Product]-[Version]-[Virtualization Type]\_[Red Hat Release Type]-[Release Date]-[Minor Version Release AMI Iteration]-[Subscription Model]-[EBS Volume Type]**
- 最初の GA AMI リリース後: **[Red Hat Product]-[Version]-[Virtualization Type]-[Release Date]-[Minor Version Release AMI Iteration]-[Subscription Model]-[EBS Volume Type]**



#### 注記

Red Hat ゴールドイメージには、サブスクリプションモデルを表す AMI 名に Access の指定があります。

Red Hat ゴールドイメージは、**Owner ID 309956199498** で公開されています。イメージを選択する際に、この所有者 ID を見つけることで、公式の Red Hat ゴールドイメージを確実に使用できます。

### 3.5.2. AWS EC2 コンソールでのゴールドイメージの検索

EC2 マネジメントコンソールを使用している場合は、左側のナビゲーションペインの **IMAGES** セクションの下にある AMI 用のメニュー項目があります。このビューで、**Private images** の指定を使用すると、登録時に指定した AWS アカウントと共有されているゴールドイメージが表示されます。



#### 注記

EC2 マネジメントコンソールのこのセクションでは、**Owner : 309956199498** のフィルターを追加することで、表示される AMI を Cloud Access に登録後に AWS アカウントと共有されたものに絞り込むことができます。

Red Hat が使用する AMI 名の別の要素を表すフィルターを追加して、表示される AMI のリストをさらに絞り込むことができます (例: **AMI Name : RHEL, AMI Name :**)。

AMI 名の例は **RHEL-8.3.0\_HVM-20201031-x86\_64-0-Access2-GP2** です。

EC2 マネジメントコンソールの **EC2 Dashboard** セクションから **Launch Instance** ボタンを使用し、**My AMIs** を選択すると、リスト表示された AMI が **Shared with me** フィルターによってフィルタリングされ、登録時に指定した AWS アカウントと共有されているゴールドイメージが表示されます。

### 3.5.3. AWS CLI でのゴールドイメージの検索

このコマンド例は、AWS CLI を使用した Cloud Access での登録時に指定した AWS アカウントと共有された、US-East-1 リージョンの RHEL 8.3 AMI をすべて表示します。AWS CLI Command Reference で、利用可能なオプション、コマンド、サブコマンド、およびパラメーターに関する追加のドキュメントが提供されています。

```
$ aws ec2 describe-images --owners 309956199498 \  
> --filters "Name=is-public,Values=false" \  
"Name=name,Values=RHEL*8.3*GA*Access*" \  
> --region us-east-1
```

### 3.5.4. AWS PowerShell Cmdlet でのゴールドイメージの検索

このコマンド例は、AWS Tools for Cmdlet を使用した Cloud Access での登録時に指定した AWS アカウントと共有された、US-East-1 リージョンの RHEL 8.3 AMI をすべて表示します。AWS Tools for Cmdlet Reference で、PowerShell コマンドレットに関する追加のドキュメントが提供されています。

```
PS > Get-EC2Image -Region us-east-1 \  
>> -Owner 309956199498 -Filter \  
>> @{ Name="name" ; Values="RHEL*8.3*GA*Access*" }
```

## 3.6. GOOGLE でのゴールドイメージの使用

ゴールドイメージを使用すると、標準インターフェイス (GCP Console、GCP クラウドシェル、および gcloud CLI) を使用して、BYOS 用の GCP に RHEL 仮想マシンをプロビジョニングできます。

Google ゴールドイメージには、以下の条件があります。

- Google がビルド、維持、公開している
- GCP 商用リージョンで利用可能

- RHEL イメージのみ

以下の手順では、GCP Console UI、GCP Cloud Shell、および gcloud CLI を使用して、ゴールドイメージを特定し、ゴールドイメージから RHEL 仮想マシンをデプロイする方法を説明します。

#### 関連資料

- [Virtual Machine images in GCP](#)
- [Using a Linux VM in GCP](#)
- [Google Cloud Platform \(gcloud\) CLI documentation](#)

### 3.6.1. Google でのゴールドイメージの命名および特定

Google グループに GCP ゴールドイメージへのアクセスが付与されると、**rhel-byos-cloud google** プロジェクトで検索できます。これは、Cloud Access のお客様に対してのみ RHEL ゴールドイメージへのアクセスを制限する特殊なプロジェクトです。

GCP における Red Hat ゴールドイメージの命名規則は、**[Red Hat Product]-[Version]-byos-[Image Creation Date]** です。

例：

- **rhel-7-byos-v20210916**
- **rhel-8-byos-v20210916**

### 3.6.2. GCP コンソールでのゴールドイメージの検索

#### 手順

1. Cloud Access で有効になっている Google グループ/アカウントを使用して、[Google Cloud Platform](#) で GCP コンソールにサインインします。
2. RHEL 仮想マシンをデプロイするプロジェクトを作成するか、選択します。
3. RHEL ゴールドイメージが表示されていることを確認します。
  - a. Cloud Shell を開きます。
  - b. 以下のコマンドを実行して、利用可能な RHEL ゴールドイメージのリストを表示します。

```
gcloud compute images list --project rhel-byos-cloud --no-standard-images
```

### 3.6.3. gcloud CLI でのゴールドイメージの検索

1. Cloud Access で有効になっている Google グループ/アカウントを使用していることを確認します。

```
gcloud info | grep account
```

2. 利用可能な Red Hat ゴールドイメージのリストを表示します。

```
gcloud compute images list --project rhel-byos-cloud --no-standard-images
```

3. 特定イメージの詳細を表示します。

```
gcloud compute images describe rhel-8-byos-v20210916 --project rhel-byos-cloud
```

### 3.6.4. Google ゴールドイメージを使用した新しい RHEL 仮想マシンの作成手順

#### GCP コンソールの使用

1. GCP Console>Home>Dashboard に移動します。
2. ナビゲーションメニューから Compute Engine>VM Instances を選択します。
3. Create Instances をクリックします。
4. 仮想マシンインスタンスの設定ページで Boot Disk セクションを見つけ、Change をクリックします。
5. Custom Images タブを選択します。
6. Select A Project をクリックして rhel-byos-cloud プロジェクトを選択します。
7. Images ドロップダウンリストから、使用するゴールドイメージを選択し、Select をクリックします。
8. 他の仮想マシンインスタンスの設定を変更し、Create をクリックします。

#### GCP Cloud Shell または gcloud CLI の使用

1. gcloud compute images list コマンドを使用して、使用するゴールドイメージの名前を見つけます。
2. RHEL 仮想マシンを新たに作成します。

```
gcloud compute instances create my-rhel8-byos --image rhel-8-byos-v20210916 --image-project rhel-byos-cloud --zone us-east1-b
```

3. 新しい RHEL 仮想マシンの詳細を表示します。

```
gcloud compute instances describe my-rhel8-byos --zone us-east1-b
```